

Weekly Bulletin 2023-2024



RI会長
ゴードンR.マッキナリー



世界に希望を生み出そう

静岡東ロータリークラブ

会長/川口尚宜 幹事/宮崎貴久

事務局/静岡市葵区追手町2-12 静岡安藤ハザマビル5F TEL054-254-5611

例会場/ホテルアソシア静岡 例会日/毎週 木曜日 12:30~13:30

<http://www.shizuoka-east-rc.jp>



会長
川口尚宜

第 3098 回 例会 令和 6 年 5 月 16 日

《司会》 宮崎 貴久 君

《合唱》 それでこそロータリー

《ソングリーダー》 藪崎 忍 君

《ゲスト》

クリアソン新宿

フットボールアドバイザー

クラブリレーションオフィサー

森岡 隆三様

《ビジター》

《本日のお祝い》

・お誕生日 該当者なし

・結婚記念日

5 月 22 日 川口 尚宜 君

5 月 29 日 藤田 尚徳 君

《会長挨拶要旨》 川口尚宜 会長

本日は、国の借金と外為特会の話をしたと思います。外為特会は、外国為替資金特別会計の略です。私は、普段 SBS テレビしか見ないのですが、先日静岡新聞を読んでいると家族が見ていた NHK ニュースが流れてきました。国の借金が 1,297 兆円になり、過去最大を更新。財政状況が一段と厳しくなり、さあ大変だというニュースでした。皆さん、この手のニュースに騙されてはいけません。

まず第一に国の借金は政府の借金という意味ですが、借金というからには貸している人がいます。誰が貸しているのでしょうか？それは日本国民です。国の借金 1,297 兆円の金額を赤ちゃんまで入れて国民 1 億 2,399 万人で割ると

一人当たり 1,046 万円になります。さあ、この国民一人当たり 1,046 万円という借金は、国民が借金をしているのでしょうか？逆です。国民が国に貸しています。つまり、国民一人当たりの資産なのです。資産は多い方が良いでしょうか？少ない方が良いでしょうか？

次に国の資産を見てみます。立命館大学経済学部のホームページに至極まともな問いかけがありました。いわく、

【確かに、日本政府の債務総額の大きさ（対 GDP 比）は先進国でも突出していますが、その是非については大きく議論が分かります。ある議論では財政の赤字を賄うために国債を発行することは、この赤字を賄うために今おこなう増税を単に将来に先延ばしにすることと同じであると、国の借金は長期間に渡って地道に国民の税金で返していくしかないという意見があります。

また別の議論として、政府の借金（金融負債）総額だけを見るのではなく、政府全体が保有する資産（その中でも金融資産）とのバランス（もしくは、負債総額から資産総額を差し引いたネットの純負債額）に着目すると、高橋洋一氏の「明快 会計学入門（あさ出版）」による計算では、実質的な政府の借金（金融負債）総額は約 120 兆円となり、会計学上”健全な”額の純負債総額なので、このままでも何も心配が要らないとする意見もあります。皆さんはこの論点にどう結論を下しますか？考えてみてください。】引用終わり、というものです。両論併記の素晴らしい問いかけだと思います。さすが、立命館大学です。

最後に外為特会のお話をします。外為特会は、政府（財務省）が万が一の円の通貨危機が起こった際に備え、ドル（多くはアメリカ国債）で保有しているものです。外為特

会の残高がいくらあるかという、2024年4月末時点のドルの残高は、日経新聞によりますと1兆2,789億ドル。保有するドルの平均の取得単価は110円と高橋洋一さんが言っていますので現在の差益は、1ドル150円-110円=40円×1兆2,789億ドル=51兆円が含み益としてあります。世界の先進国の外為特会对GDP比は、5%以下に対して日本は30%以上持っています。これを正常の5%にし、含み益を国民に還元してくれれば、43兆円が国民に配れます。この金額は、消費税を2年間タダにできるレベルです。現在日本は、足りないのは需要でこのデフレを起す原動力が外為特会に隠されています。一発で国民に配らない場合は、この43兆円を使ってAI、核融合、量子コンピュータ、全固体電池、医薬品開発の基礎研究に投資し、日本の民間企業に開放したらいかがでしょうか？さて、あなたならどう考えますか？本日は以上です。

《来賓卓話》



演題 「Footballを通して学んだこと」

所属 クリアソン新宿

役職 フットボールアドバイザー

クラブリレーションオフィサー

氏名 森岡 隆三様

《卓話》

自己紹介

プロサッカー選手として15年間プレーをし、引退して15年が経ちました。引退後はプロの指導者としてトップチー

ムのコーチ、ユースの監督を経て、J3ガイナレ鳥取の監督も経験しました。指導者としていろんなカテゴリーや立場を経験した後、クラブを運営するサイドの方々の考え方、モノの見方にも興味が湧いたこともあり、2019年にエスパルスアカデミーのアドバイザーという形でエスパルスに復帰、在籍しながら、Jリーグ主催の経営人材育成プログラム、SHC（スポーツヒューマンキャピタル）を取得。同年に育成のマネジメント職、ヘッドオブコーチングの資格であるJHoCを受講、取得。そして2020年より清水エスパルスのアカデミーヘッドオブコーチングを4年間務め、アカデミーフィロソフィーの作成と運用を探求し、選手、指導者ともに人材の育成に努めてきました。一方でメディアの仕事、主にNHK解説者として、東京オリンピック、カタールワールドカップの解説も務め、メディアの立場からもスポーツ界を俯瞰的に見ると同時に、サッカーを多面的に学んでいます。今年のパリオリンピック、サッカー競技で解説予定です。

本題

幼少期から今に至るまでの中で、自分の成長に繋がった、自身の殻を破るきっかけとなった、心に残る3つのエピソード。①100%を大きくする ②良いパスを出せば良いパスが返ってくる ③井の中の蛙、大会を夢見るべし

一つ目は高校一年生の時のもの。自己紹介スライドを見るとエリート街道突っ走ってきたかのようなのですが、決して順風満帆なんかではなく、むしろ高校に入るまでは挫折感満載の日々でした。小学校、中学校では勝てないチーム、何の選抜にも選ばれたこともない。桐蔭学園高校サッカー部にはサッカー推薦でなくては入れない。そのチームに入るために、中学サッカー部仲間と当時監督だった『李国秀』氏の元に直談判をしに行き、練習参加を許可してもらったところから始まった。

何とか入れはしたが、全くついていけない日々。貧血で倒れることも。そうこうしていると秋になり、選手権予選もあっさり勝ち抜き権の代表に。中学までの自分には考えられない状況に「とんでもないチームに入ったものだ」と改

めて驚く。

そして県大会決勝の後、休み明けのグラウンドでのこと。チーム全体のミーティングで監督が言ったのが「選手権（全国大会）では隆三を使う」との言葉。

我が耳を疑う、寝耳に水どころかチームメイト、先輩の視線が刃となって自分の体中に刺さるのを感じ、とてつもないプレッシャーに押しつぶされそうな日々。「迷惑はかけられない、ミスをしてはいけない」という消極的な姿勢がミスを誘発、負のループに陥ってしまい、数日後、レギュラーを降りる決断をする。

一年前には「高校のチームに入りたい」とお願いしに行ったにも関わらず、一年後にまさかの「レギュラーを外してください」と言いに行く。その心を見透かしたかのように監督が言ったのは、

「お前は100%プレーしているつもりかもしれない。でも俺の求める100%はここ（ずっと高いところを指しながら）。この差をどう埋める？」

目から鱗という言葉が我が身に初めて体験した感覚、そんな物事の見方を知ることを感じたのは「自分はずっと頑張ればいだけだ！」という前向きな思考になり、積極的なプレーに繋がり、チームメイト、先輩からもなんとか認められ、全国大会に出場することとなる。

この大会により自信をつけることができ、高校3年時にはユース代表に選出、高校卒業と同時にプロサッカー選手の道を歩ことになる。物事にはいろんな見方がある！自分自身の限界を勝手に決めつけない！100%は大きく出来る！ということを学び感じた体験だった。

二つ目はエスパルスに移籍してきた当初の話。

プロ15シーズンで最も楽しく充実していたシーズンは？と聞かれると真っ先に思い浮かぶのは1996年、オズワルド・アルディレスが監督、スティーブ・ベリマンがコーチをしていたシーズン。実はその年、開幕戦こそ試合に出場したものの、その後はレギュラーどころかベンチメンバーにも入れない日々が続いていた。それにも関わらず、毎日練習に行くのが楽しくてしょうがなかった。それはなぜか？と考えてみると、成長実感が得られる日々だったから。なぜ

成長実感が得られていたのか？当時、オジー（アルディレス）の作り出す練習は内容も新鮮で面白ければ、選手に対する声掛けやアプローチの仕方も、受け取る側の選手として安心感、心地良さがあった。例えばパスワーク（3ポイント、対面）などで、ミスをしてしまった選手のことを無闇に咎めるのではなく、カバーした選手に「Good Job！」と声をかける。すると選手全体にミスがあったとしてもカバーしようとの意識が生まれ、結果としてパスを出す選手が安心してプレーできることに繋がり、集中しながらもリラックス出来て、チャレンジの質も高まっていったのだと思う。それは選手の積極的なアクションを加速させ、アクションがさらなるアクションへと連鎖していき、選手一人一人の成長はもちろん、チームとしてもシーズン当初はなかなか勝てなかった1996年だったが、秋には念願のクラブ初タイトルを獲得することになった。

今思えばチーム内で心理的安全性を生み出していたと考えられ、私自身、思いっきり夢中でサッカーに没頭できたことが、大きな成長に繋がった最大の要因だと思う。

またとにかく監督もコーチも細かいところまで見てくれることや、チーム内に生まれた承認の文化、いいプレーには「ナイスタッチ！」など選手間でも自然と認めあう「クリーンなフィードバック文化」は、後に市川大祐、伊東輝悦、斉藤俊秀、三都主アレサンドロ、戸田和幸など、次々と日本代表が生まれることに繋がった最大の要因と言っても過言ではないと思う。

「良いパスを出せば、良いパスが返ってくる」と、子供の頃に教わったことを、改めて心の底から感じたシーズンだった。

三つ目は日本代表の時の話。

1999年、トルシエ監督が率いる日本代表はコパ・アメリカという南米選手権に出場する機会を得る。

渡航前日、成田のとあるグラウンドにてトルシエ監督が急に「本気で勝ちたいと思っている選手だけついてこい」と選手に向かって声を荒げた。選手たちは何が始まったのかと半分呆れ困惑しながら監督に付き合いハーフラインをまたぎ、行ったり来たりを数度繰り返した。

大会はペルー、パラグアイ、ボリビアと試合を行い、1分2敗と惨敗。ペルーとは大会前に日本でもキリンカップで対戦しており、正直勝てると思っていたが、真剣勝負での迫力はものすごく、親善試合は所詮、親善試合だと痛感する。大会前、チームメイトと時計の雑誌を見ながら「そろそろこんな時計欲しいよね」など話をしてしたが、パラグアイに0-4と敗戦した後は「時計なんてどうでもいい、とにかく上手になりたい」となっていた。

最後のボリビアでようやく勝ち点は拾えたものの、南米選手権での厳しい戦いは、トルシエ監督のいう「本気」の意味を理解するには十分な大会となった。当時の私は南米の強豪国に「勝ちたい」というよりも「日本代表に定着したい」の方が優っていた。もし本気で勝ちたいと思っていたら、もっと相手のことを知るべく、調べ、準備し、対策できたはず。計画、準備、心構えが変わっていたはず。そして結果も変わっていたかもしれない。

目標の設定次第で、計画、準備、が変わり、心構えも変わる。そして一番大きく変わるのは未来の可能性！ということを知った。

2000年シドニーオリンピックBest 8、2000年アジアカップ優勝、2001年コンフェデレーションカップ準優勝、そして2002年W杯日韓大会Best 16といった成績に繋がるきっかけになった大会だったと言える。

余談として、2001年の春のこと。当時、史上最強との呼び声の高かったフランスと試合をして0-5で敗戦、日本に帰ってきた時のこと。家のポストにファンレターらしきものが入っており、家に入り封を切って手紙を見ると、私の目に飛び込んできたのは「だから言ったでしょ、あなたたちは井の中の蛙なんだって」という痛烈な言葉だった。とてつもないショックと悔しさでどうにかなりそうだったが、湧き上がった反骨心は成長の大きな糧となったのも事実だ。

「『井の中の蛙、大海を知らず』はしょうがない事実。自分のいる環境は簡単には変えられないけど『大海を夢見る』蛙でありたい」と心から思う。夢見ることから目標や計画が生まれ、自分の未来の可能性を大きくしてくれる。それは特に育成の現場で大事にしたいこと。

最後に「プロで成功するための条件とは」

「一人でも多くの人に応援してもらえるようになること」身近な人（家族や友人、学校の先生、チームメイト）に心から応援してもらえるようになる、その連続がスタジアムを埋め尽くす数万人のファン、サポーターに応援されるようになることに繋がる！

これはきっとサッカーやスポーツ界以外でも、どの世界でも同じこと！

育成の選手たちに伝え続けたい大事なこと！

《スマイル報告》

伊藤 裕次 君 結婚記念日のお花をありがとうございます。25周年です。また来週、娘が結婚式を名古屋のアソシア静岡系列のホテルで挙げます。記憶に残る季節になりそうです。

《出席報告》

	会員数	出席	欠席	MU
5/30/	55(53)			
5/16	55(53)			
5/9	55(53)	45	8	2
5	月暫定出席率	%		

(会報作成 川崎 依子)